

# 『教行信証』「行巻」において 漢字が伝える「顕」と「真実」

森 村 森 鳳

はじめに

『顕浄土真実教行信証文類』というタイトルにうかがえるように、『教行信証』は浄土の真実を開顕する書である。周知のとおり、『教行信証』は、もともと、漢字・漢文で書かれている。私は中国語に翻訳した（拙著『教行信証』中国語翻訳・注釈）が、その際、親鸞が、漢字・漢文のもつ多義性という特徴を生かしながら、仏教の真実を奥深く受け止め、それを如実に文字でとらえるために、心血を注いだことが伝わってきた。表意文字としての漢字が持っている同音異義の特徴を活用し、注音と意味の解釈を同時に用いたり、通常の受け止めと異なる訓読・区切り方を施したり、反切という手法などを駆使したりして、イメージを拡大して、漢字・漢文が方便と真実の教え（顕・密という二重性）を同時に伝えるように工夫されているのである。

例えば、次の引用文の中の「命」の表記である。

偈申己心、宜言歸命。（命字、眉病反。使也教也道也信也計也召也。）

偈は己心を申ぶ、宜しく歸命と言ふべし。「命字は、眉病反なり。使なり。教なり。道なり。信なり。計なり。召なり。」<sup>(1)</sup>

文の中で、親鸞は反切を用いて「命」の中国語の発音を示している。「反切」とは、漢字の字音を示す伝統的な方法の一つで、漢字二文字で漢字音を表す方法である。具体的に言えば、漢字二字を用いて、一方の声母と、他方の韻母を組み合わせてその漢字の音声を表す。すなわち 命字は、眉 (mei) と病 (bing) の反切であり、発音は「ming」である。親鸞は、文字でその意味を懇ろに示すと同時に、「命 (ming)」という発音によって、重みと強さをもって、人々の聴覚にも発信しているのである。<sup>(2)</sup>

本論では、行巻に説かれる「真実の行」を通して、具体的な例を挙げて、漢字が伝えている「顕」と「真実」の奥義を解明していきたい。

## 一 真実の行とは

『教行信証』の「行巻」の「顕浄土真実行文類」という題号の前には、「諸仏称名の願」という標挙がある。この「行の巻」では「諸仏称名の願」が真実行の根拠であるとして、ここに挙げられている。その願名の下に「浄土真実の行 選択本願の行」とある。つまり、「諸仏称名の願」によるところの「行」、これこそ真実の行であり、それは阿弥陀仏の選択本願（十八願）の行であると明示されている。真実の行について行の巻の本文に次のように示されている。

謹按往相廻向、有大行有大信。大行者、則称無碍光如来名。斯行即是撰諸善法、具諸徳本、極速円満、真如一実功德宝海。故名大行。然斯行者、出於大悲願。

謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、則ち無碍光如来の名を称するなり。この行は、即ち是れ諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。然るにこの行は、大悲の願より出でたり。<sup>(3)</sup>

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

これは真実の行とは何かを明らかにする文であるが、ここで、「大行」、  
「大」という語に注目してみたい。

まずは、「大行」についての親鸞の受け止めをみよう。

大行者、則称無碍光如来名。斯行遍摂一切行極速円満、故名大行。

大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、あ  
まねく一切の行を摂す、極速円満す、かるがゆえに大行と名づく。(4)

「あまねく一切行を摂す」、「極速円満す」という言葉に示されたとおり、  
大行は超越的なものである。それは「大」という言葉に含まれている。「大」  
は、「小」の対語であるが仏教用語としての「小」は世間的なもの、衆生  
の計らいなどを意味するのに対して、「大」は、音訳が摩訶 (maha) であり、  
「真実と方便」の中での「真実」を意味する。

それ自体が廣大無辺、万有に遍在しながら万有を包容することを意味し、  
多・勝・妙・不可思議という。

謂周遍含摂。体無不在。物無不是。(中略) 故名為大。

謂わく周遍し、含摂し、体として、在らざるはなく、物としては  
ならざるものなきなり。(中略) ゆえに大を名となす。(5)

親鸞自身によって次のように述べられている。

多は大のころなり、勝のころなり、増上のころなり。大は  
おほきなり、勝はすぐれたり。よろづの善にまされりとするべし。(6)

すなわち、親鸞の著作に数多く用いられる「大」は世間的な大小という  
二元対立の意味においての大とは質的に異なり、次元を異にした超世間的  
な、人間の計らいを超える無限の「大」であり、真・仮の二元対立を超え

る絶対の真実である。その故、「大行」は、「真実の行」の同義語である。真実の行は阿弥陀如来の願力の働きである。

非凡夫廻向行、是大悲廻向行故名不廻向。誠是選択摂取之本願、無上超世之弘誓、一乘真妙之正法、万善円修之勝行也。

凡夫廻向の行にあらず、これ大悲廻向の行なるがゆえに不廻向と名づく。誠にこれ選択摂取の本願、無上超世の弘誓、一乘真妙の正法、万善圓円修の勝行なり。(7)

衆生の念仏は阿弥陀如来の誓願から賜る行であるから、「大行」という。

言行者、利他円満大行也。

行というのは、利他円満の大行なり。(8)

「利他」・「円満」・「大」は、いずれも、真実を意味する語である。「大行」という念仏の行は、阿弥陀仏の願力に乗っている行である故に真実の行という。

親鸞は、衆生が阿弥陀仏の名号を聞いて信心歓喜する刹那に一念の信心を発起する瞬間、すなわち、往生の正因を得ることになるという「信心正因」を強調する。

諸有衆生聞其名号信心歓喜、乃至一念、至心廻向、願生彼国、即得往生住不退転。

諸有衆生、その名号を聞いて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん、至心廻向したまえり、かの国に、生まれんと願せば、すなわち往生を得、不退転に住せん。(9)

信心を正因とする念仏の行は、阿弥陀仏の願力に乗っているゆえに「大

行」という。

まずは、『教行信証』の「行巻」の最初「顕浄土真実行文類」における「真実教行」の「真実」の義を明確にしておこう。

仏教用語としての真実は権仮の対語である。永遠に変わらない、究極的な、絶対の真実を実・真実という。一時的に仮の手だてとして設けたものを権・権仮という。

真実・権仮、あるいは、真実・方便ともいう。この仏教を特徴づける教え方は仏教その始まりとともにスタートしたものである。釈尊は過去世の七仏の第一仏、つまり、最初仏の覚りについて次のように説いている。

毘婆尸仏。於閑静處復作是念。我今已得此無上法。甚深微妙難解難見。息滅清淨智者所知。非是凡愚所能及也。斯由衆生異忍異見異受異學。依彼異見各樂所求各務所習。是故於此甚深因緣不能解了。然愛盡涅槃倍復難知。我為彼說彼必不解更生觸攪。作是念已。即便默然不復說法。時梵天王知毘婆尸如來所念。(中略)從梵天宮忽然來下。立於仏前(中略)爾時世尊三聞梵天懇勸勸請。即以仏眼觀視世界衆生。(中略)譬如優鉢羅花・鉢頭摩華・鳩勿頭摩華・分陀利華。或有始出汙泥未至水者。或有已出與水平者。或有出水未敷開者。然皆不為水所染著。易可開敷。世界衆生亦復如是。

毘婆尸仏、閑静處においてまたこの念をす。我、今すでにこの無上法を得たり。甚深微妙にして解しがたく見ることかたし。息滅清淨なる智者の知るところなり。これ、凡愚のよく及ぶところにあらざるなり。斯(すなわ)ち、衆生は忍を異にし、見を異にし、受を異にし、學を異にするによるなり。彼の見を異にするに依りて、おのおの求むところを樂(この)み、おのおの習う所を務む。このゆえに、この甚深の因緣において解了することあたわざるなり。然かれば、愛の尽きたる涅槃はますますまた知り難し。我もし説を為さば、

彼、必ず解せずして、更に触攪を生ぜん。この念を作(な)しおわりて、すなわち黙然してまた法を説かず。時に梵天王、毘婆尸如来の念ずるところを知り、(中略)梵天宮より忽然来下し、仏前に立つ。(中略)その時、世尊三たび梵天の懇懃なる勸請を聞きて、即ち仏眼を以て世界の衆生を觀視す。(中略)譬えば、優鉢羅花(utpala)(睡蓮・青)鉢頭摩華(padma)(赤)鳩勿頭華(raduma)分陀利華(puṇḍarika)(白)の、或いは始めて?泥を出で未(いま)だ水に至らざる者あり、或いは已に出でて水と平なる者あり、或いは水を出でて未だ敷開せざる者あり。然かるに皆水のために染著せられざれば開敷すべきことやすし。世界の衆生もまたまたかくのごとし。(10)

毘婆尸仏は覺った直後、罪惡煩惱にまみれた衆生の心の働きを見た。それは、自分が覺った法の眞実とは、異質のものだと思い、衆生に説法しようとはしなかった。しかし、三回梵天の懇願を聞いて、改めて、仏眼をもって世界の衆生を見るとき、さらに衆生の蓮としての存在という奥深い眞実が見えた。すべての衆生の罪惡煩惱としての存在の現実に応じて、すべての奥深い眞実を開発するために、大乘仏教の教えを特徴づける眞実に近づくための方便・眞俗二諦(第一義諦と世諦など)という教えが生まれてくる。

無縁大悲教化一切衆生。

無縁大悲、一切の衆生を教化す。(11)

菩薩如是知衆生種々志樂。隨應說法令得解脫。

菩薩、かくのごとく、衆生の種々の志樂を知りて、隨應して説法して解脫を得しむ。(12)

如来、善知無量方便欲化衆生。故作如是種々説法。譬如良医識衆生種々病源。隨其所患而為合藥並藥所禁。

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

如来、善く無量の方便を知りて衆生を化せんと欲す。ゆえにかくのごとき種々の説法を作す。譬えば、良医の衆生の種々の病源を識り、その患ふ所に随ひて、薬と並びに薬の禁じるるところを合するを為すが如し。<sup>(13)</sup>

以上の考察を踏まえて言えば、仏教における真実は、方便の対語でありながら、方便とは裏腹になっている。すなわち、すべてのイメージや言語文字になる教えは、真実を伝えるための方便であり、すべての方便の教えは真実に裏付けられているといえよう。

## 二 漢字の役割

仏教は中国に伝わって、「格義仏教」の危機を乗り越え、権実の教えも漢字・漢文の特徴によって保たれてきた（「格義仏教」とは、仏教の教義を中国に固有な道教・老荘思想にあるものになぞらえて当てはめることである）。<sup>(14)</sup>

『教行信証』の中での漢字・漢文は仏教の教えの真実と方便という重層的な働きを担っている。具体的な例を挙げて考察していこう。

### (一) 「仁」について

此乃権化仁、斉救済苦悩群萌、世雄悲、正欲惠逆謗闡提

これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。<sup>(15)</sup>

「権化仁、斉救済苦悩群萌」について、従来、次のような翻訳・解釈がなされている。

韋提をはじめ、提婆も阿闍世もこの底下の凡夫を救わんがために、

かりに凡夫の姿をとって此の世に現われて来られた権化の方々ではないであろうか。(16)

これらは仮にすがたをあらわされた聖者たちが苦しみ悩む人々を救いたいと願い、(中略) 仏や菩薩が衆生を救うために仮にすがたをあらわしてこられたこと、聖人は、提婆や阿闍世や韋提などを権化の聖者とみられるのである。(17)

これこそ、仮なる姿をとって、ともに等しく苦悩する人々を救済される方々であり、(下略) (18)

以上のような従来の受け止めは、権化の方便を起す者を阿弥陀以外の者になるところ、とくに、阿闍世が救済される対象ではなく、救済の主体となるところは、親鸞の受け止めの方便の一面を示している。親鸞の受け止めはさらに奥深い意味がある。次のように明示されている。

是以、今抛大聖真説、難化三機、難治三病者、憑大悲弘誓歸利他信海。矜哀斯治憐憫斯療。喩如醍醐妙藥療一切病。濁世庶類、穢惡群生、応求念金剛不壞真心。可執持本願醍醐妙藥也。応知。

ここをもって、今大聖の真説に拠るに、難化の三機・難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまう。たとえば醍醐の妙薬の一切の病を療するがごとし。濁世の庶類・穢惡の群生、金剛不壞の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなりと。知るべし。(19)

つまり、提婆や阿闍世や韋提などは「難化の三機・難治の三病」という救済される対象であり、救済の主体は「大悲の弘誓」である。それについて、先学には、次のような指摘もある。



『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

ここにいう阿闍世とは、親鸞聖人にとっては、十方衆生の姿であると同時に、だからこそ親鸞一人の姿である。(20)

このような、この親鸞の原文と先学の指摘を踏まえれば次のように受け止められる。

権化の方便を起こす阿弥陀如来が等しく苦悩する人々を救済する。

阿弥陀仏が主語となり、救済の主体となり、韋提をはじめ、提婆や阿闍世など登場人物は目的語となり、救済される対象となる。このような受け止めの根拠をいくつか挙げる。

#### 漢字「仁」の意味

「人」と「二」とで構成された「仁」という文字は、もともと儒教思想の核心である仁愛、つまり人間同士が尊敬しあう。愛し合うことを意味する。また、仁者の略語で、人間の尊称である。

「仁」と「人」は発音（ren）が同じであるので、互いに通仮字として用いられている。

不<sup>ひと</sup><sup>えら</sup>人<sup>あた</sup>而<sup>あた</sup>予<sup>あた</sup>之<sup>あた</sup>、謂<sup>あた</sup>之<sup>あた</sup>好<sup>あた</sup>人<sup>あた</sup>。不<sup>ひと</sup><sup>えら</sup>人<sup>あた</sup>而<sup>あた</sup>取<sup>あた</sup>之<sup>あた</sup>、謂<sup>あた</sup>之<sup>あた</sup>好<sup>あた</sup>利<sup>あた</sup>。

人を扱はずして之に予ふるを、これを好人と謂ひ、人を扱はずして之を取るを、これを好利と謂ふ。(21)

「謂之好人」の「人」は「仁」の通仮字として用いられている。

何以守位曰仁

何をもってか位を守る。曰く仁なり。(22)

「曰く仁なり」の「仁」は「人」の通假字である。そのゆえに、世間的意味において、仁は人を意味する。儒教思想の核心としての仁は人間同士が愛しあい、尊敬しあうことを意味する。「仁者愛人」（仁なる者は、人を愛す）（孟子・離下）仁者とは仁者人を愛する者である。

こういう「仁」という文字の語源に、「凡夫の姿をとって此の世に現われて来られた権化の方々」、「聖人は、提婆や阿闍世や韋提などを権化の聖者とみられる」という先学の「権化仁」についての受け止めの根拠もあると言えよう。

しかし、仏教用語としての「仁」は、基本的に衆生に対する仏を意味する。例えば、「仁尊」（仏の尊号）、「仁王」（仏の尊称。仏は「能仁」・「法王」と号する故、「仁王」という）、「仁塔」（仏塔）、「道仁」（釈尊）など。

#### 文の対偶の関係

「権化仁、齊救濟苦惱群萌。世雄悲、正欲惠逆謗闡提」という二つの文は、対偶関係になっている。対になる主語である「権化仁」・「世雄悲」はその重みも、対等であるべきである。釈尊と阿彌陀如来が対偶に表現されるのは親鸞の著作に多く見られる。例えば、総序の始めの「難弘弘誓度難度海大船、無碍光明破無明闇慧日」という文も対偶の形になっている。<sup>(23)</sup>

「二尊」についての親鸞のとらえ方。

縁二尊大悲 獲一心仏因。

二尊の大悲に縁って、一心の仏因を獲たり。<sup>(24)</sup>

阿彌陀超發於誓，広開法藏，致哀凡小，選施功德之宝。釈迦出興於世，光闡道教，欲拯群萌惠以真実之利。

彌陀、誓いを超發して廣く法藏を開き、凡小を哀れみて選びて功德の宝をすることを致す。釈迦、世に出興して道教を光闡して群萌を拯い、恵むに、真実の利をもってせんと欲すなり。<sup>(25)</sup>

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

良知、無徳号慈父、能生因闕。無光明悲母、所生縁乖。

良に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは、能生の因闕けなん。光明の悲母ましまさずは、所生の縁乖きなん。(26)

つまり、親鸞の言文の中で、釈尊と対等関係になっているのは阿弥陀如来ほかない。以上の考察を踏まえて、「権化仁、斉救済苦惱群萌」は表層的な意味と深層的な意味の二通りの受けとめがあると考えられる。

権化仁者、若依初義者指仏、上下雖殊是非別也。若抛後義者通指、調達・闍世・韋提発起衆。

権化の仁とは、もし初義に依らば仏を指す。上下殊といえども、これ別にあらざるなり。もし後義に抛らば通じて調達・闍世・韋提を指す。発起衆なり。(27)

という『六義鈔』の文言にも、二重の意味が含まれている。二重の意味を同時に受け止めるならば、二者が生かし合う関係になるが、表層的な意味だけにとどまれば、真実を失う方便、仏教の教えとして働く方便の機能を失い、世俗性に陥る恐れがある。

#### 権化思想についての受け止め

権化思想は元々インド古来の信仰である。その信仰において、神が人の希望を満たすに人間の世界に姿を現し、神通を起す。仏教はこの説を生かしながら、それを次元的に更新する。それは「如来」という言葉が意味するところに窺えるように、真如から来生するという意味で、釈尊は自分が如来であるという。真如とは超越的な法・自然の法則・万有の元である。真如の法に目覚め、それを人々に示す者は如来、つまり権化という。

世尊金剛体 権現於化身（中略）法身是正覚 法界即如来

世尊は金剛の体にして、かりに化身を現す。法身は、これ正覚なり。  
法界は、すなわち如来なり。(28)

しかし、仏教が発展する歴史の中で、権化思想は各民族の宗教信仰によって、迷信の色を帯びる変身説に変質されていくところがある。例えば日本での「神仏習合」である。

我が国固有の諸神を以て諸仏・菩薩の垂迹となし、これらの諸神に多く権現の称呼を附するに至れり。(中略)本邦の神祇にして権現の称号あるもの少なからず、就中、熊野権現、那智飛滝権現(中略)等は孰れも著名なり。(29)

「神仏習合」について次のような指摘がある。

私たち日本人は「神仏は一体だ」という了解が支配的です。(中略)神は日本民族の宗教神「神祇」であり、仏はもちろん「如来」です。(中略)「神祇」は「霊」でしょう。如来は法です。仏法というでしょう。法というのは法則です。(30)

この指摘を踏まえて言えば、日本民族宗教神祇における権化は、仏教における権化との根本的な違いとしては、無形の法を有形の神・仏にしたところにある。そこには日本民族信仰の中で「権に化ける(形を変える)」という感覚の移入があるようである。このような移入が民族心理に深く根おろしているため、支配的になりがちで、仏教の教えを真実の方向へ導くに、超えがたい妨げになっているようである。

浄土教の流れの中では、権化を阿弥陀如来の廻向の働きとする。「五念門」の「園林遊戯門」には以下のようにある。

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示応化身回入生死菌、煩惱林中、遊戯神通至教化地。

出第五門とは、大慈悲をもって一切苦惱の衆生を觀察して、応化の身を示す。生死の菌、煩惱林中に回入して、神通に遊戯して教化地に至る。(31)

親鸞は浄土の流れの源流を汲みながら、さらに「みだ仏は自然のようをしらせりょうなり」と阿弥陀仏の種明しを示し、仏教における権化の本源を開顕することになる。これは、すなわち、「権化の仁」という言葉の最も深層的な意味だと言える。

## (二) 「衍」・「衍」 「衍」について

此無量寿経優婆提舍蓋上衍<sup>エン反</sup> { [ 衍字 ] カンの反。口且反。楽也。 }  
之極致不退之風航 [ 航字 カウ反 ] 者也。

この『無量寿経優婆提舍』は、けだし上衍<sup>じょうかん</sup> { 衍字、口・且の反なり、<sup>kanの反</sup> <sup>ko gie</sup> 楽なり。 } の極致、不退の風航なるものなり。(32)

(注：文の中に、[ 航字 カウ反 ] というような片仮名に「反」を用いる表記がある。このような表記は親鸞の著作に数多くある。「浄土和讃」などにおける数多くの「反」字を考察してみれば、それらの「反」字は、漢字二文字で漢字音を表す「反切」ではないが、「反切」という言葉が持っている音声を示す意味合いを借りて、文字の音声を示してしていると考えられる。例：「雨行大臣證として」の「證」の左に「カナフ反 サトル反」と、片仮名を振ってある。)

文の中での「上衍」は、『論註』の原文で「上衍」であり、音注と解釈はない。(33)

上衍は、梵語 (mahā - yāna) の音訳。摩訶衍ともいう。小乗 (hinā - yāna) の対語、意識は大乘の教法である。

従来、この一文は『論註』の原文を元にして、漢字を訂正し、「上衍」の意味で解釈されてきた。しかし、坂東本で親鸞によって書かれているのは「衍」という文字であり、漢字にはない文字である。これを「カンの反。口且反。楽也」と親鸞は注釈している。この注釈に当たる漢字は、「衍」字である。「衍」字の発音は「kan」であり、日本語訓読の「<sup>カン</sup>衍」である。「<sup>カン</sup>衍」の字の意味は、『説文解字』において次のように示されている。

「衍、行喜兒。空早切。(衍、行き喜ぶる兒なり。空 (kong) と早 (han) の切なり)、「楽也」(意味：歩きながら喜ぶ様である。楽しむことである。発音は空 (kong) と早 (han) の反切である。)<sup>(34)</sup>

衍の字については、次のように解釈する。

衍、水、朝宗於海。(百川歸海の意)。以 (yi) 浅 (qian) 切。<sup>(35)</sup>

ここでの親鸞の「口 (kou)・且 (qie) の反なり、楽なり」という音注と解釈は漢字の「衍」の字にあたる。しかし、訓読では、「<sup>エン反</sup>衍」である。「<sup>カン</sup>衍」と「<sup>エン</sup>衍」の二重訓読になっている。「衍」字は親鸞によって創造された「衍」+「衍」の合体字だとも考えられる。この合体字は、「衍」の意味に、「楽也」という「衍」の意味も加えられる。「<sup>カン</sup>衍」+「<sup>エン</sup>衍」の合体字「衍」に、「この行は大悲の願より出でたり」という「行の巻」の奥義、すなわち、真実の行と真実の信の関係が顕されていると考えられる。

真実の行と真実の信の関係と十七願十八願の相関関係は先学の研究に明かに示されている。<sup>(36)</sup>

九

そして、「そこに灼熱な宗教生命の火花が散るかと思えば、冷徹な思索の深淵が寂然として讃えられている。宗教生命と哲学生命が渾然として一如となったところ、それが『教行信証』の世界」<sup>(37)</sup>と先学にも指摘されている。『教行信証』の世界には、漢字や表記などの工夫によって真実の

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

教えが厳密な思考の結晶として伝えられているが、真実の教えに出会う親鸞の喜びも、そこに脈動している。その喜びは前後呼応して『教行信証』の終始を貫いている。

総序：慶哉、西番月支聖典、東夏日域師積、難遇今得遇、難聞已得聞。  
敬信真宗教・行・証、特知如来恩徳深。斯以慶所聞、嘆所獲矣。

慶しいかな、西番・月支の聖典、東夏・日域の師積、遇がたくして今遇うことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり、真宗の教・行・証を敬信し、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

後序：慶哉、樹心弘誓仏地、流念難思法海。深知如来矜哀、良仰師教恩厚。慶喜弥至、至孝弥重。因茲、鈔真宗銓、撫浄土要。

慶しいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これに因って、真宗の銓を鈔し、浄土の要を撫う。<sup>(38)</sup>

この総序と後序の文に、慶・慶喜が『教行信証』の出発点であり帰着点でもあることも読み取れる。

言歡喜者形身心悦豫之貌（兒）也。（中略）憶念即是真実一心、真実一心即是大慶喜心、大慶喜心即是真実信心、（中略）是心即是大慈悲心。

「歡喜」というは、身心の悦豫の貌<sup>えちよ かおぼせ あらわ</sup>を形すなり。（中略）憶念すなわちこれ真実一心なり。真実一心すなわちこれ大慶喜心なり。大慶喜心すなわちこれ真実信心なり。（中略）この心すなわちこれ大慈悲心なり<sup>(39)</sup>

九〇

これを踏まえて言えば、「論註」の原文に「衍」と書かれているが、親

鸞がそれを二通りに受け止め、「衍<sup>カン</sup>」+「衍<sup>エン</sup>」の意味を同時に伝える「衍」の字を創造したと考えられる。

### (三) 帰と説

「帰命」の「帰」という文字にも同様に親鸞が文字の音注に施した工夫がうかがえる。親鸞自身の文にも、次のように反切が用いられている。

尔者、南無之言帰命、帰言至也。又帰<sup>エチ反セチ反</sup> 説<sup>エチ反セチ反</sup>（左注 ヨリタノムナリ 右注 タヨリノムトイフ）也。説<sup>セチノ</sup>字、悦<sup>エチノ</sup>音（右注 ヨロコブナリ）也。又帰<sup>セイ</sup>説<sup>セイ</sup>（左注 ヨリカカルナリ）也。説<sup>セチノ</sup>字ハ、税<sup>セイ</sup>ノ音ナリ。悦<sup>エチ</sup>税<sup>コエ</sup>二ノ音ハ告<sup>エチ</sup>也。述也。宣述人意也。宣（左：セン 右：ノブル）<sup>ノブル</sup> 述（左注 人の意ヲセンジュチスルナリ）人意也。

しかれば、南無の言は帰命なり。帰の言は至なり。また帰<sup>エチ反セチ反</sup> 説<sup>エチ反セチ反</sup>（左注 ヨリタノムナリ 右注 タヨリノムトイフ）なり。説<sup>セチノ</sup>字、悦<sup>エチノ</sup>音（右注 ヨロコブナリ）也。また帰（左注 ヨリカカルナリ）は説<sup>セイ</sup>なり。説<sup>セチノ</sup>字は、税<sup>セイ</sup>ノ音なり。悦<sup>コエ</sup>・税<sup>エチ</sup>二の音は告<sup>セイ</sup>なり。述なり。人意を宣（左：セン）述（左注 人の意ヲセンジュチスルナリ）するなり。（40）

親鸞は、帰命を帰説に解釈し、さらに帰説の「説」について詳しく解釈の上に、丁寧に音注を施した。では、「説」に注目しよう。「説」に悦、告、述、宣、人の意を宣述すると解釈している。文の重点は「悦 (yue)・税 (shui) の二の音なり」と、「説」字の二つの発音を強調するのである。

「説」は古代中国語において多音字であり、すなわち多義字である。次のとおりである。

- ①説 (shuo)。言う。日常の言語行動。
- ②説 (shui)。(相手の心を動かすため) 説く。陳述する。
- ③説。(yue) 悦の通假字。悦の意、喜ぶ。

この三つの発音の中で、親鸞は、日常の言語行動を表す「説 (shuo)」



『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

の発音を採用していない。②と③の意味を用いている。親鸞は「通仮字」という漢字の用法を用いている。「税 (shui)」が「説 (shui)」の②の意味の通仮字であり、(相手の心を動かす) 述べる、陳述する意味での「説 (shui)」の意、親鸞の言葉でいうならば「如来の本願を説き賜る」という意味である。③の「説 (yue)」は「悦 (yue)」の通仮字であり、歓喜の意味を示している。(通仮字とは古代中国語における漢字の用法の一つである。通は通用、仮は借りる。すなわち、ある漢字を他の漢字で代用するという。代用する漢字は、主に、近音・同音字という二種類がある。)

この二つの発音により伝えようとするメッセージを考察してみよう。まず②説 (shui)。(相手の心を動かすため) 説く。陳述するという意味での発音について。親鸞は次のように述べている。

歸命者本願招喚之勅命也。

歸命は本願招喚の勅命なり。(41)

歸命とまふすは如来の勅命にしたがふころなり。(42)

歸命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひてめしにかなふとまふすことばなり。(43)

これらの文によって示されるように、親鸞における歸命には如来の勅命と勅命にしたがう「南無阿弥陀仏」を称える衆生の行動という二重の意味が込められている。この中で、歸命の能動力は如来であり、衆生は働き加えられ、勅命にしたがう所動の身であるという意味合いが込められている。

そして、この意味における「説」の字を探れば、悦の通仮字。悦の意である。発音は (yue)。この発音に喜ぶという意味が込められている。

信楽まことにときいたり 一念慶喜するひとは往生かならずさだ  
まりぬ。(44)

如来の勅命にしたがう帰命する衆生の心身の慶びがこの悦の通仮字である説 (yue) 字に凝縮している。(45)

### 三 顕・密について

『顕浄土真実教行証文類』というタイトルにうかがえるように、『教行信証』は浄土の真実を開顕する書である。「顕と真実」は仏教用語として、「顕・密」、あるいは、「方便・真実」と表される。

「化身土巻」に、次のような文がある。

准知観経、此経亦応有顕彰隱密之義。

観経を准知するに、この経にまた顕彰隱密の義あるべし。(46)

「顕彰隱密」という言葉は、親鸞が『観無量寿経』を解釈するために用いた語である。顕は経文の表面に顕れた義、密は裏面に隠れた奥深い義、彰はその奥深い義を彰らかにすること。親鸞は『観無量寿経』にも、『阿弥陀経』にも、「顕彰隱密」の義があると説いている。

「顕彰隱密」の中での「顕・密」は、対語として仏教の教えを特徴づける言葉である。

仏法有二種。一秘密二顕示。

仏法は二種あり、一は秘密なり。二は顕示なり。(47)

その中での「密」は、「密語」・「密号」という言葉の意味合いにあるように、仏教用語としての「密」の基本的な意味は、「真」である。それは、

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

人間の計らいの次元で対立してとらえられる「真・仮」の「真」とは異質なものであり、言葉の意味を超えるものである。衆生の計らいとは次元的に異なるもので、如来が悟った真諦である。

密、(中略) 非凡小所能知、故称密。

密、(中略) 凡小のよく知るところにあらず、故に密と称す。<sup>(48)</sup>

対して、顕は、顕示という言葉に示されるとおり、密をはっきり顕す働きである。つまり、仏教における顕と密はこれまで考察してきた方便と真実の同意語である。『首楞嚴三昧経』に、この「顕」が「密」を顕す働きが詳しく語られている。その中で、仏・菩薩が「秘密法蔵」、「密法」を得て、「諸法章句言辞」において法輪を転じて、「諸欲を自恣して遊戯し、衆生を化す」ことを説いている。さらに「顕」の働きを、「無量人」を此岸から彼岸へと度す「導師」、「船師」に喩え、その重要性を強調する。<sup>(49)</sup>

即ち、顕密は仏教における真実と方便の関係を表す語である。言語・文字・形ではっきり示される教えは、顕の教え、対して、言語・文字の意味を超えて、形で示されない教えは、密の教えという。

ところが、このような顕と密の関係性は、時代の変遷の中で、次第に人間の分別心により世間的な二元対立的な意味に変質することになる。

そこに、神秘的な仏教流派が生まれ、「密行」、「密供」、「密呪」、「密付」（仏法を師から弟子へと秘密に伝えること）など、神秘的な色合いを帯びる仏教用語。故意に難解にする仏教の教えや「顕劣密勝」という優劣論も立てられた。<sup>(50)</sup>

これを異にして親鸞の「顕彰隱密」についての受け止めは次のようである。

按『無量寿仏観経』者、有顕彰隱蜜義。言顕者、即顕定散諸善、開三輩三心。然二善三福非報土真因。諸機三心自利各別而非利他一心。

如来異方便、忻慕浄土善根。是此経之意、即是顕義也。言彰者、彰如来弘願、演暢利他通入一心。縁達多・闍世惡逆、彰釈迦微笑素懐、因韋提別選正意、開闡弥陀大悲本願。斯乃此経隱彰義也。

『無量寿仏観経』を按ずれば、顕彰隱密の義あり。顕というのは、すなわち、定散諸善を顕し、三輩・三心を開く。しかるに二善三福は報土の真因にあらず、諸機の三心は自利各別にして利他の一心にあらず。如来の異方便、忻慕浄土の善根なり。是はこの経の意なり。すなわち、これ顕の義なり。彰というのは、如来の弘願を彰し利他通入の一心を演暢す。達多・闍世の惡逆に縁って、釈迦微笑の素懐を彰す。韋提別選の正意に因って、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなわちこの経の隱彰の義なり。<sup>(51)</sup>

これは、仏教における「顕・密」の教えについての親鸞独自の解釈である。坂東本での親鸞の自筆で、「顕 アラハス」。「彰の義 内にアラハス」。「隠 カクス」。「密 カクス」と訓している。以上の文の中の意味を踏まえて言えば、顕は表面に明らかに顕す。彰は内面に明らかに彰す。隠は隠蔽であり、密は仏の密意であり、「如来弘願」、「利他通入一心」であると説いている。「顕」は「如来異方便」であり、「顕」も「彰」も「隠」も動詞である。すべては、「弥陀大悲の本願を開闡す」という働きに動くのである。

ここに、これまで考察してきた漢字・漢文が方便の働きを通して真実を伝えるように、親鸞が施した工夫が窺える。

『観経』についての受け止めに限らず、「顕彰隱密」とは親鸞が会得した仏教における「顕・密」の奥義をも示しており、『教行信証』を読む指南ともなると思う。

八五

それは、『顕浄土真実教行証文類』というタイトルに示されているのではないか。私は、これまで『教行信証』そのものは顕彰隱密の意味を帯びる経典として読むべきだと考え、研究を重ねてきた。

私は、親鸞が伝えようとする「真実」を探りながら『教行信証』の中国

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

語の翻訳を進めている過程で、各時代の『教行信証』の意識・注釈を読んでいく中、気づいたこともある。先学の方々は親鸞の言葉・経典の言葉をわかりやすく意識してきた。それはそれぞれの時代の人々が親鸞の教えと出会うために、重要な役割を果たしてきたと思う。しかし、親鸞が伝えようとする真実に出会うには、親鸞が用いている一つ一つの言葉・文字をさらに深く掘り下げる必要があると思う。例えば、次の言葉である。

1 大利益→大きな利益。 2 清浄業の「清浄」→清らかな行業 3 最勝真妙の正業→もっとも勝れた真の正しい行業。

いずれも世間と超世間・真諦と俗諦・方便と真実という対語の一極を示す言葉である。

大利益の「大」は前述した通り、清浄業の「清浄」は汚染業（人間の働きが作った業）の対語、である。「最勝」は勝敗の二元対立を超える絶対の勝を表し、「真妙」の「真」も方便と真実の中での真実を意味している。これらは、親鸞自身の文言に明示されている。

如来清浄廣大至心是名真実心。(中略) 然具縛群萌、穢濁凡愚、無清浄信心、無真実信心。

如来の清浄廣大の至心なり、これを真実心と名づく。(中略) しかるに具縛の群萌・穢濁の凡愚、清浄の信心なし、真実の信心なし。(52)

大信心希有最勝真妙清浄。

大信心は希有・最勝・真妙・清浄なり。(53)

従無始已来、一切群生海、(中略) 最勝浄信難叵獲得。

無始よりこのかた已来、一切群生海、(中略) 最勝の浄信、獲得しがたし。(54)

八四

親鸞の言葉にうかがえるように、大利益の「大」・清浄業の「清浄」、最勝真妙の「最勝」に込められた密意がうかがえる。

終わりに

『顕浄土真実教行証文類』と銘打った『教行信証』における「顕」と「真実」の関係は、今迄考察してきたとおり、「顕彰隠密」によって明示されている。その中で核心となる「密」が「弥陀大悲の本願」であり、『教行信証』の核心である。これこそ親鸞が『教行信証』を持って伝えようとするものであろう。

総序の最後に次のような言葉がある。

慶所聞、嘆所獲矣。

聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。(55)

この文には『教行信証』の教えが凝縮されていると言われている。この中で「聞」について、親鸞は次のような受け止めを示している。

重誓名声聞十方。

重て誓うらくは名声、十方に聞こえんと。(56)

名号を称すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがふころ一念もなければ アンヤウジャドナリ 實報土へむまるとまふすころなり。(57)

すなわち、親鸞は、念仏が衆生にとってまさに「聞く」という感得だという意味合いで受け止めている。

これまで考察してきた「聞」の意味を踏まえて考えれば、「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずる」という一文は、念仏を慶び、念仏によって獲るところを嘆ずるという意味を伝えている。これは、『教行信証』における親鸞の究極のメッセージと言えるであろう。ここに窺えるように、『教行信証』が開顕する真実は、ただの抽象的な理論ではなく、「慶」と「嘆」

『教行信証』「行巻」において漢字が伝える「顕」と「真実」

という文字に込められた親鸞の心の脈動をも伴っている。そういう親鸞が用いた漢字と漢字に施した丁寧な工夫に気づくとき、その脈動が生き生きと伝わってくる。

本論は、弥陀の救済を知らせるべく親鸞が工夫を凝らした文字、とりわけ、「行の巻」における漢字や漢文のなかから具体的な例を上げて行の巻に説かれる「真実の行」・大行の奥義を追求したものである。

また親鸞の他力本願の救済観を「顕彰隱密」という言葉で掘り下げてきた。『教行信証』の中に親鸞が施した様々な工夫についてさらに解明し、親鸞が受け止めた仏教の奥義・真実を現代の人々に伝える道をこれからも求めていきたい。

## 注

- 1 親鸞による『論註』の引用 『真宗聖教全書』二 15頁 曇鸞『論註』『真宗聖教全書』一 282頁
- (2) 拙論「親鸞が選んだ漢字の響きが伝える真実——「反切」の手法で伝える音声メッセージ——」『同朋文化』第十三号 2018年3月
- 3 『真宗聖教全書』二 5頁
- 4 『真宗聖教全書』二 444頁
- 5 『首楞莊嚴義疏注経』『大正大藏経』三十九巻 867頁
- 6 『真宗聖教全書』二 628頁
- 7 『真宗聖教全書』二 444頁
- 8 『真宗聖教全書』二 443頁
- 9 『真宗聖教全書』二 444頁
- 10 『長阿含経』『大正大藏経』第一巻 8頁
- 11 『仁王般若波羅蜜経』巻上 『大正大藏経』第八巻 826頁
- 12 『大宝積経』巻第九十 『大正大藏経』第十一巻 515頁
- 13 『大般涅槃経』第十三巻 『大正大藏経』第十二巻 441頁
- 14 拙論「『教行信証』における音声言語」『同朋大学仏教文化研究所紀要』第39

号 2020 年 3 月参照

- 15 『真宗聖教全書』二 1 頁
- 16 星野元豊著 『講解 『教行信証』法蔵館 昭和 52 年五月』
- 17 高木昭良著 『教行信証の意識と解説』永田文昌堂 昭和 54 年 4 月
- 18 池田勇諦 神戸和麿 渡邊晃純 監修 『傍訳教行信証全書』四季社 2000 年 1 月
- 19 『真宗聖教全書』二 96 頁
- 20 池田勇諦 『仏教の救済』北國新聞社 2015 年 1 月
- 21 遠藤哲夫著 『管子』中 『新釈漢文大系』43 明治書院 1989 年 3 年 5 月
- 22 今井字三郎著 『易経』下 『新釈漢文大系』23 明治書院 1990 年 9 月
- 23 拙論 『『教行信証』の言葉の源』真宗教学研究第 26 号 2004 年 4 月参照
- 24 『真宗聖教全書』二 454 頁
- 25 『真宗聖教全書』二 2 頁
- 26 『真宗聖教全書』二 33 頁
- 27 『六義鈔』『真宗聖教全書』二 205 頁
- 28 『金光明最勝王経』卷第一 『大正大藏経』第十六卷 406 頁
- 29 『望月 仏教大辞典』世界聖典刊行協会 1983 年 5 月
- 30 池田勇諦 『真実の実践』東本願寺出版部 2009 年 7 月
- 31 『真宗聖教全書』二 107 頁
- 32 『真宗聖教全書』二 14 頁
- 33 曇鸞著 『浄土論註』『大正大藏経』第四十卷 826 頁
- 34 『説文解字』孫永清編著 [東漢] 許慎撰 [清] 段玉裁・注 中国書店 2011 年 1 月
- 35 『説文解字』孫永清編著 [東漢] 許慎撰 [清] 段玉裁・注 中国書店 2011 年 1 月
- 八二 36 広瀬惺『顕浄土真実行文類講讀』東本願寺出版部 2014 年 池田勇諦『『教行信証』に学ぶ』真宗大谷派東京教務所 2013 年
- 37 星野元豊など校注 『親鸞』岩波書店 1985 年 10 月
- 38 『真宗聖教全書』二 1 頁 203 頁



『教行信証』「行卷」において漢字が伝える「顕」と「真実」

- 39 『真宗聖教全書』二 72 頁
- 40 『真宗聖教全書』二 22 頁
- 41 『真宗聖教全書』二 22 頁
- 42 『真宗聖教全書』二 564 頁
- 43 『真宗聖教全書』二 567 頁
- 44 『真宗聖教全書』二 489 頁
- 45 拙論 「親鸞が選んだ漢字の響きが伝える真実——反切の手法で伝える音声メッセージ」『同朋文化』第十三号 2018年3月参照
- 46 『真宗聖教全書』二 156 頁
- 47 『大智度論』卷四『大正大藏經』 二十五卷
- 48 『首楞嚴義疏注經』卷第八之二『大正大藏經』 三十九卷
- 49 『首楞嚴三昧經』卷上『大正大藏經』 十五卷
- 50 拙論 「『教行信証』化身土卷の漢字が伝えるメッセージ」同朋大学仏教文化研究所紀要第三十三号 2014年3月参照
- 51 『真宗聖教全書』二 147 頁
- 52 『真宗聖教全書』二 451 頁
- 53 『真宗聖教全書』二 157 頁
- 54 『真宗聖教全書』二 62 頁
- 55 『真宗聖教全書』二 1 頁
- 56 『真宗聖教全書』二 43 頁
- 57 『真宗聖教全書』二 619 頁